



トークセッション

日野市を拠点とする他大学における地域活動について当事者から紹介していただいた後、学生たちと地域の方々、地域づくりへの想いや姿勢について語り合いました。

他大学学生が行う地域活動の発表

■三沢中地区 中村 美希氏 (中央大学)

市内の落川交流センターで活動し、「食と防災」の要素を持ったイベントを月1回、季節に合わせたイベントを年4回実施しています。前者では、自然豊かな環境の中、参加者皆で同じものを食べることで共通の意識や話題が生まれ交流が実現しています。またこの時、防災の要素としてご飯を薪で炊き、災害時への備えとしています。こうした取り組みで、子育て世代や高齢者がつながる多世代交流の場が生み出されています。

■三中地区 須崎 貴寛氏 (明星大学)

市内の空き家を活用するプロジェクトの一環として2018年4月にスタートした、明星地区つながりの家『アムール』の運営に参加しています。空き家活用に向けた会議は、毎週水曜日に第二武蔵野台地区センターで開かれているお茶飲み会『二水会』のメンバーが中心となって進行されました。高齢化の激しい三中地区において、近在の明星大学の学生をはじめ子どもから大人まで多世代が交流できる場を生み出そうということでアムール発足に至りました。

『これからの居場所の可能性について』

学生という若い力を地域に活かす「戻りたくなる地域づくり」を進めるため、4つの視点から、地域活動に対する学生と大人の想いの共有を図りました。

1. 何が自分を地域に向かわせるか

中村：そこに人のつながりがある、そして自分を受け入れてくれる場所があるということが活動を行う大きな理由になっています。地域にはさまざまな世代、いろいろな活動をされている方がおり、多様な価値観に触れられる点にも魅力を感じました。



▲二中地区/伊東 那奈、高橋 智聖、田原 瑞穂氏

須崎：大きな挫折を経験し人生を考え直した時、自分の性格や個性とは何だろうと思いました。ボランティア活動に参加し関心のベクトルが他人に向かう中で、自分の人格を見つめ直すことができました。こうした経験から、地域は自分を成長させてくれる、自分らしくいられる場所だと感じています。

伊東：私たちは未熟で、地域に出ると時に指導をいただくことがあります。そんな時、日野市役所や市民の方が支えてくださることで立ち直り、活動をやり遂げられています。そうした経験から、人の温かさや居心地の良さを感じて地域活動に行きたいと思うようになって感じています。



▲三中地区/須崎 貴寛氏、今城 則子氏

2. 学生が参加したことによる変化

西見：落川交流センターでは活動に参加する人の立場はすべてフラットで、学生も「一緒に活動する仲間」として受け止めています。子育て世代にも参加してもらっていますが、若い人たちの行動力や発想力が私たちの活動を活気のあるものにしていただいていると感じます。

今城：アムールは明星大学に通じる大通りの近くにあり、学生の方々が折々顔を見せてくれます。利用者は「元気をもらえる」と、とても喜んでます。

田原：学生は私たちの地域活動に必要な存在。たくさんの可能性を秘め、若い世代ならではの発想力と考えを私たちに伝えてくれます。また、いつも一生懸命で大人が見習うべきところがたくさんあります。

3. 学生にとって、居場所や故郷とは?

中村：活動によって、地域には自分が関われる、居場所と思えるようにつながれる場所があるんだと気づかされました。地域の中に居場所を感じると、出身や住んでいる場所以外にも「ここが故郷」だという意識が生まれてくるのかなと思います。

須崎：居場所や故郷を考える際にキーワードとなるのは、「どれだけの安心感がそこで得られるか」だと思います。自分の場合、その安心感は何から生まれるのかを考えると、信頼できる人がその地域でどれだけ活動しているかを知ることだと思いました。

高橋：居場所や故郷は私にとって、愛があふれる、自分を受け入れてくれる、会いたい人がいる、本来の自分でいられるところだと感じています。私は群馬県出身ですが、日野市の地域活動に参加して、自分を必要とってくれる場所があることは本当に素敵なことだと実感しています。



▲三沢中地区/中村 美希氏、西原 幸雄氏

4. 学生と活動をするにあたり大切にしていること

西見：「一緒に活動する」姿勢です。「奉仕してもらう」という受け止め方では若い人は活動してくれません。仲間として温かく受け入れることが大切だと思っています。

今城：アムールに来てくれる学生、一人ひとりの想いをまず大切に受け止めて、それを皆で共有することから始めています。

田原：大人の考えを押し付けないことです。学生たちはそれぞれしっかりと自分の考えを持っていますので、存分に力を発揮できる雰囲気をつくり、より良い活動するために学生たちの考えを取り入れていくことが大切だと思います。



▲本学の地域づくりの取り組みを楽しく紹介するパネル展示も実施。

トークセッションを終えて

須賀：これからの地域づくりを考える際、3つの視点がポイントとなります。まず、学生は日野市の地域おこし協力隊だということ。地域おこし協力隊は総務省が行っている、地域に若い人に入ってもらう事業で、地域活性化を実現するとともに参加者の約6割が定住を考慮する成果を生み出しています。2つ目は寛容性。若い人たちの拙い面を面白がりながら受けとめる姿勢です。3つ目は、学生を後期子ども世代と捉えるということ。学生は子どもにも大人にも近い世代なので、学生を中心に遊びを遊ぶ取り組みを行うことで自然に多世代交流が実現していきます。学生ができることはたくさんあります。それを受けとめる温かい大人がたくさんいることが、これからの街づくりに望まれるのではないかと思います。

《市長挨拶》大坪 冬彦 日野市長

学生の活動に脱帽するとともに、豊かな発想力に基づく行動から新たな示唆をいただいたと感じました。また、学生と地域住民がお互いに育て合う関係が築かれていることにも気づかされ、学生の日野市への愛情にも感銘を受けました。須賀先生から指摘していただいた、学生を受けとめる寛容性は、地域の中に十分に培われつつあると思います。「学生を後期子ども世代と捉える」ことを念頭に、これからの日野市の街づくりをしっかり進めていきたいと思っています。



参加者アンケートから（抜粋）

- 「自分からもっと地域に出ていけば受け入れてもらえるのかな」と感じ、その行動が故郷や居場所の獲得につながることに改めて気づかされました。
(女性・20代・学外・日野市内)
- 学生や地域の方がどのように地域に関わっているか、またその想いを知ることができて良かった。「故郷」「居場所」がキーワードだと感じました。
(男性・40代・学外・日野市内)
- 現代生活学科の、現場に実際に出ていくことからの学びの意義を深く感じました。学生の力、柔らかな発想力と感受性にも感動しました。
(女性・50代・学外・日野市内)